

機関番号：32682

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2009～2010

課題番号：21820045

研究課題名（和文） 初期天神信仰の形成と『源氏物語』の研究

研究課題名（英文） The study on formation of TENJIN belief and The Tale of Genji

研究代表者

袴田 光康 (HAKAMADA MITSUYASU)

明治大学・文学部・兼任講師

研究者番号：90552729

研究成果の概要（和文）：説話・漢詩文などに見られる天神信仰の多面的な様態を分析し、『源氏物語』における天神信仰の影響を明らかにすることにより、聖代観や国風文化を基盤とした十世紀の同時代的言説の特徴を解明した。

研究成果の概要（英文）：The study analyzed multipronged modality to “TENJIN” belief in the legends and Japanese classic poems, and the feature of the coetaneous remark theory of the tenth century of which it was basic sage and national culture was clarified by analyzing the influence of “TENJIN” belief in The Tale of Genji.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,070,000	321,000	1,391,000
2010年度	430,000	129,000	559,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・国文学

キーワード：『源氏物語』、天神信仰、『日蔵夢記』

## 1. 研究開始当初の背景

（1）『源氏物語』の準拠研究においては、延喜・天暦の時代に準えられているという〈聖代〉準拠説が定説化している。その中であって、菅原道真は、光源氏の流離の歴史的準拠の一つと見なされ、また道真左遷後の『菅家後集』からの引詩も古注釈以来、数多く指摘されてきている。

（2）近年では、「明石」巻の桐壺院の亡霊に関して、醍醐天皇墮地獄説話との関連が注目されている。『日蔵夢記』などに見られるこの説話は、地獄から出現する桐壺院の亡霊の造形に先行するものとして重要であるが、天皇の墮地獄を説く特異な言説は、律令国家

の転換期と新たな〈国風文化〉の形成期という十世紀の時代性から考えなければならない。『源氏物語』への影響についても、思想的な把握が必要があり、従来の『源氏物語』研究の枠組みを超えた学際的研究が求められている。

## 2. 研究の目的

（1）桐壺院の亡霊の造形と醍醐天皇墮地獄説話との間に密接な関係が認められるにしても、その一方で、院の亡霊は都の朱雀帝に対しては、御霊的な崇りの性格を帯びて描かれている。つまり、院の霊には、崇る側と崇られる側の矛盾する性格が見られることになる。この問題を考えるためには、出典であ

る『日蔵夢記』の正確な理解が必要とされる。従来の『源氏物語』の研究においては、「準拠」・「源泉」という視点が中心であったため、表面的な類似点のみが注目され、『日蔵夢記』全体の論理が見落とされてきた。そこで、本研究では、真壁俊信・竹居明男などの天神信仰研究の成果を踏まえながら、『日蔵夢記』本文の整理と校訂を行い、その上で、『日蔵夢記』全体の論理の中で、『源氏物語』との関係を再検討することを第一の目的とした。

(2) 天神信仰は、道真の善提供養、道真霊の怨霊化に始まり、御霊としての火雷神の信仰、仏教化による帝釈天との同化、北野天神の創建を経て、十一世紀初頭の一条朝における国家的祭祀に至る。この初期天神信仰の形成は、〈国風文化〉の形成期とほぼ同時代的な現象である。従来の神祇体系に属さない「天神」の誕生と、それまで軽視されてきた仮名表記による物語文学の台頭、両者の文化的意背景には、律令国家の崩壊に伴う価値観の変化が共通の基盤としてあったと考えられる。そこで両者のかけ橋として注目されるのが、受領化していく文人官僚の言説と思想である。彼らは、菅家の門人として「文道の祖」である天神の信仰形成を支え、一条朝の文運再興を促したが、官職においては不遇であり、一条朝の〈聖代〉観は彼らの申文から広まっていく。一方、物語文学の担い手となった女房らは、その文人官僚を父とする受領階級の出身者であり、紫式部もその一人であった。こうしたことを考慮すると、『源氏物語』と天神信仰の関係を考える上では、単にテキスト間の引用関係だけでなく、文人官僚らの同時代的な思想的影響を視野に含めることが重要であると考えられる。十世紀の文人官僚らの天神信仰や〈聖代〉観から『源氏物語』の道真引用や〈聖代〉準拠説へと分析を進めることを本研究の第二の目的とした。

### 3. 研究の方法

(1) 研究の土台として、①『源氏物語』の古注釈書における道真関連注釈の集成、②一条朝までの天神信仰に関わる漢詩文の調査、そして、③京都北野天満宮蔵『北野文叢』巻十一所収永久寺本『日蔵夢記』の文献調査と本文校訂などを行った。①は、『源氏釈』・『紫明抄』・『異本紫明抄』・『河海抄』・『岷江入楚』の五本を調査対象として、既に刊行されている活字本や影印本を利用した。②は、『本朝文粹』・『本朝麗藻』・『続本朝文粹』を調査対象とし、通行の刊行本をテキストとして利用した。③は、北野天満宮の承諾を得て、文献を実見して、デジタル撮影を行った。これを基に、既に刊行されている神道大系『北野』所収『日蔵夢記』(真壁俊信校訂)の本文との比較を行った。③の校合・校訂を含む研究

成果は、ホーム・ページ上で公開することにした。

(2) 一条朝の文人官僚らが天神祭祀において捧げた漢詩と、『北野天神御伝並御託宣等』・『天満宮託宣記』などの初期天神信仰の言説を比較分析することにより、神仏習合における仏教的世界観と本朝意識の形成の関係を究明しようとした。具体的には〈文章経国〉思想という中国的な理念を捨て切れなかった文人らの「天」の思想が、仏教的な「天」、そして神仏習合的な「天神」へと変容していく過程を、表現・思想の両面から分析するものである。初めに、北野天満宮・大宰府天満宮の実地調査を行い、それらの天神祭祀の沿革に文人官僚らがどのように関わり、それが彼らの漢詩や申文にどのように反映されているのかを調べた。次いで、天神信仰の託宣や説話との比較を行い、最終的には、『源氏物語』における天神信仰の影響、特に、道真が天に無罪を訴えて生きながら天神となったという天拝山伝承との関係について考察を進めていく方法をとった。

### 4. 研究成果

(1) 諸注釈書の調査結果、『源氏物語』における菅原道真関連の注釈は十三か所に及ぶことが判明した。鎌倉期の『源氏釈』(前田家本)において、「明石」巻の「駅の長にくしとらする人もありけるを」に関して、『大鏡』に見える道真伝承詩を指摘するのが最も早い例である。これは、道真の実作ではなく、瀬戸内海沿岸部に広く流布する「綱敷天神」伝承などと同様に、各地の道真来訪譚の一部を示すものであったと考えられるが、『源氏物語』がその伝承を踏まえることは、十世紀には既にそうした伝承が流布していたことを意味する。南北朝の『河海抄』において、道真の引詩の指摘は急激に増加を見せる。『河海抄』は、中世注釈の集大成であり、延喜・天曆の〈聖代〉準拠説を確立した注釈書である。源高明と共に菅原道真を、光源氏の流離の歴史的準拠として重視した態度と呼応するように、道真の引詩の指摘も十か所に増えている。その引詩は、すべて道真が左遷後の作である『菅家後集』からの引用であり、「須磨」・「明石」巻に集中しているという特徴を示す。更に、室町期の『岷江入楚』は、清涼殿落雷事件、醍醐天皇墮地獄説話、天拝山伝承などの天神信仰の説話・伝承についても注釈に取り上げるようになる。『河海抄』以来、光源氏の須磨退去の準拠として菅原道真は重視されてきたが、延喜・天曆の〈聖代〉準拠説という〈読み〉の枠組みにあっては、それと齟齬するような醍醐天皇墮地獄説話を語る天神信仰への言及は回避されてきたと見られる。その意味で、『岷江入楚』が、

桐壺帝＝醍醐天皇の準拠説を伝承世界の言説にまで徹底させる形で天神信仰に言及した意義は評価される。但し、『岷江入楚』は、天神縁起に依拠しているが、天神縁起の成立は鎌倉初頭である。従って、本研究では、『源氏物語』の出典として、初期天神信仰の言説に注目するに至った。

(2) 初期天神信仰の言説として注目されるのが、十世紀後半の成立と目される『日蔵夢記』である。醍醐天皇墮地獄説話の出典として『源氏物語』の研究でもしばしば取り上げられてきた同書は、『北野誌』所収『北野文叢』、及び神道大系『北野』で翻刻され、活字化されている。しかし、『北野文叢』本は明治期の古いものであり、現在、もっぱら用いられている神道大系本の本文校訂には疑問の箇所も少なくない。そこで、本研究では、北野天満宮の許可を得て、同社蔵の『北野文叢』巻十一所収永久寺本『日蔵夢記』の文献調査とデジタル撮影を行った。調査の結果、内題には「道賢上人冥土記」と「夢記」が併記され、前者の下には、題号が不明なため『扶桑略記』によって補ったものであるという注記が付されていた。神道大系本は「日蔵夢記」と題を起こしているが、これは単に「夢記」とあるべきことが判明した。また、従来は日蔵の兄の浄蔵のこととされてきた「汝兄慚破戒」は「汝女慚破戒」の翻刻ミスと思われることも明らかになった。つまり、これは浄蔵を破戒僧として非難したのではなく、もし日蔵が無慚の破戒僧であるならば、という仮定のことを述べた文章であったのである。こうした『日蔵夢記』の本文校訂の成果は、ホーム・ページ上で公開した。

(3) 一条朝前後の天神信仰に関わる詩文を残した文人官僚たちとしては、慶滋保胤(『本朝文粹』巻十三「賽菅丞相廟願文」)、高階積善(『本朝麗藻』下巻「七言。九月尽日侍北野廟、各分一字詩一首」)、藤原為時(同前)、源孝道(同前)、大江匡衡(『本朝文粹』巻十三「北野天神供御弊並種々物文」らが確認された。彼らの詩には「文道の祖」としての道真への崇拝と共に、「天」・「蒼穹」などの表現が認められた。これは、『菅家後集』巻頭詩「自詠」の「時々仰彼蒼」の句と関連するものと見られる。「彼蒼」は天道と同じ意味であり、精誠は天に通じるという天神信仰の根底をなす思想である。そうした天道の思想が、沈淪する文人階級の心情とも呼応するものであり、天拝山伝承形成の基盤となったと考えられる。一方で、託宣の類には、道真が帝釈天に哀訴したとするものが多い。天拝山伝承の基盤には、文人らにおける天道と、仏教者らにおける帝釈天の二つの要素が重層的に認められることになる。中国的「天」か

ら仏教的「天」への過度的な言説状況の中に天神信仰は形成されたと言える。『源氏物語』の中には見られる天拝山伝承の影響については、帝釈天は見られず、その意味では文人官僚たちの天道の思想に近い。しかし、光源氏の祈りに応えて、彼を救済する桐壺院の亡霊を帝釈天的な超越的存在として把握することも可能である。これは、桐壺院の霊を崇りの論理や墮地獄説話から理解するのは大いに異なる解釈を齎すものである。天神信仰の形を用いながら、天や帝釈天の位相に天皇霊を描いたところに、『源氏物語』の独自性が認められると共に、それはまた、中国的な価値観を仏教と習合させる形で日本的な価値へと変換していく〈国風文化〉の特性を顕著に示すものと考えられる。

(4) 天拝山伝承の研究を進めていく過程で、天神信仰における天神と帝釈天との結びつきが神仏習合の思想的基盤として重要な役割を果たしていることが判明した。当初、帝釈天を特に取り上げる研究計画はなかったが、平安期の本朝意識や〈国風文化〉の形成とも密接な関係するものと判断したので、本研究テーマの一環として研究を推進した。帝釈天は、平安中期の『三宝絵』の釈迦の前世譚の中にも、人の孝心や道心を試み、精誠を尽くした者には救済や福を齎す神として語られているが、教義上、三十三天の「天主」とされる帝釈天は、中国的な「天帝」の概念と類似する現世支配の神格を持っていた。十三世紀に編まれた韓国の『三国遺事』には、「ハヌニム(天神)」・「天帝」・「帝釈天」が同体の神として描かれており、すでに新羅仏教において「天神」と「帝釈天」の習合がなされていたことが窺われる。すなわち、そうした新羅仏教の神仏習合の思想が北九州地方に伝わり、安楽寺(太宰府天満宮の前身)を中心とした天神信仰の基盤をなした可能性が指摘できる。これは、平安期の本朝意識や〈国風文化〉が、外来の思想・文化に刺激を受けながら、それを内面化することによって形成されたものであることを示唆する。こうした平安期の神仏習合の言説に関する研究は、今後の新たな研究の基盤となった。なお、この方面における研究成果については、国際学会の場においても発表講演を行った。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

① 袴田光康、「平安仏教における〈外来神〉一円仁と新羅人ネットワーク」、『淵民学志』第15輯、2011・2、pp173-238、査読有

②袴田光康、「金沢文庫本「長恨歌」の本文と訓読」、『白居易研究年報』第11号、2010・12、pp62-104、査読無

③袴田光康、「『三国遺事』における「桓因」と「帝釈」—日本の天神信仰の視点から—」、『淵民学志』第14輯、2010・8、pp439-495、査読有

④袴田光康、「『源氏物語』千年紀をふりかえって—文化研究の行方と〈作者〉の再登場—」、『文学・語学』第197号、2010・7、pp22-25、査読無

〔学会発表〕(計3件)

①袴田光康、「平安仏教における〈外来神〉—円仁と新羅人ネットワーク—」、2011年1月17日、東亜文化国際学術大会(東亜文化研究所創立記念国際学術検討会)、中国・南通大学

②袴田光康、「天神信仰と帝釈信仰—韓国・対馬から見た大宰府天満宮の信仰基盤—」、2010年8月11日、韓国語学文学国際学術会議、中国・延辺大学

③袴田光康、「『三国遺事』における「桓因」と「帝釈」—日本の天神信仰の視点から—」、2010年1月25日、韓国語学文学国際学術会議、ベトナム・ハノイ大学

〔図書〕(計4件)

①袴田光康、「光源氏の流離と天神信仰—「須磨」・「明石」巻の天拝山伝承をめぐって—」、袴田光康・秋澤互編『源氏物語を考える—越境の時空—』、2011、武蔵野書院、(6月刊行予定のため頁数未詳)

②袴田光康、『源氏物語の史的回路—皇統回歸の物語と宇多天皇の時代—』、2009、おうふう、pp7-323(単著)

③袴田光康、「匂宮と敦道親王—明石中宮の諫めをめぐって—」、袴田光康・小山清文編『源氏物語の新研究』、2009、新典社、pp57-80

④袴田光康、「源氏一品経」、日向一雅編『源氏物語と仏教』2009、青簡社、pp217-234

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.kisc.meiji.ac.jp/~hakamada/nichizo.html>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

袴田 光康 (HAKAMADA MITSUYASU)